

研究論文

異文化理解のための民族衣装の教材化  
—教材「世界の民族衣装」の開発と実践—

栗山丈弘\* 豊田かおり\*

The Use of Folk Costumes as Teaching Materials for Cross-cultural Understanding

Takehiro Kuriyama\* Kaori Toyoda\*

要旨

本研究では、ファッション教育においてグローバル人材を育成していくために、グローバル人材育成推進会議がグローバル人材の要素の1つとして挙げた「異文化に対する理解」を育む教育実践の一事例として、民族衣装を題材とする教材開発を行いその実践と検証を試みた。本研究ではまず、民族衣装のカタチ（形態・形式）に着目し、参加型学習の手法を取り入れた2つの教材「民族衣装を作ってみよう」（シミュレーション教材）と「民族衣装を分類してみよう」（フォトランゲージ教材）からなる学習単元を構想した。さらに、この教材を、ファッション系大学の学生を対象に実験授業を行ない、その学習成果を、授業者による観察および事前・事後アンケートをもとに検証した。その結果、学習方法として取り入れた参加型学習が、学生に能動的学びをもたらし、かつ、異文化理解の視点として取り上げた文化的多様性と共通性の受容という点で一定の効果が見られることを示唆する結果が得られた。

（キーワード 民族衣装：Folk Costumes, 異文化理解：Cross-cultural Understanding, 文化的多様性と共通性：Cultural Diversity and Commonality, 参加型学習：Participatory Learning）

1. はじめに

我が国政府は、2011年5月に新成長戦略の一環として「グローバル人材の育成」を推進することを決定し、グローバル人材育成推進会議を発足させたことを皮切りに文部科学省、経済産業省などで具体的な施策を展開することに着手しはじめた。グローバル人材育成推進会議の審議をとりまとめた「グローバル人材育成戦略」によれば、グローバル人材とは以下の要素が含まれることを挙げている<sup>1)</sup>。

- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としての

アイデンティティー

ファッションビジネス分野においても、生産と消費の両側面で台頭する中国、インドなどアジア諸国への対応及び、ファストファッションの潮流の中での欧米系ブランドとの競争など、グローバル化に対応する人材を育成していくことは喫緊の課題となっている。それゆえ、高等教育でのファッション人材養成においてもグローバル人材の要素を育む教育を行なっていくことが必要であるが、その責を十分に果たしているとは言いがたい。

本稿では、上記の要素Ⅲのうち「異文化に対する理解」を育むファッション教育の一事例として民族衣装を題材とした教材開発について報告する。民族衣装は、異文化理解教育や国際理解教育のポピュラーな題材であり、小学生向けの学習図書<sup>2) 3) 4)</sup>や高等学校での実践については報告され

\*文化学園大学

ている<sup>5)</sup>が、高等教育における実践研究の報告は見られない。本研究では、今後、民族衣装を題材とし異文化に対する理解を育むファッション教育の教材やカリキュラムを構想していくことを念頭におき、その第一歩として「カタチ」に着眼した教材開発と実践を試みその成果を検証した。

## 2. 教材「世界の民族衣装～カタチの多様性と共通性」の概要

民族衣装は、それぞれの文化を反映し多様なカタチ（形態・形式）を持っている。本教材は、世界の民族衣装のカタチを切り口として、文化的多様性と共通性を理解することにアプローチするものである。

民族衣装のカタチ即ち形態にはいくつかの分類方法がある。学術的な分類としては例えば、小川安朗は、腰布型、掛布型、貫頭衣、前開型、体形型の5種類に区分している<sup>6)</sup>。一方、田中千代は、自らフィールドワークを通じてコレクションした民族衣装を、まく、あな、わ、はくの4つに区分している<sup>7)</sup>。本教材においては、厳密な学術的な区分よりも、感覚的、感性的な区分を用いることがふさわしいと考え、田中千代の分類を採用した。

教材作成にあたっては、学習者が主体的に取り組めるように参加型学習<sup>8)</sup>の手法を取り入れ、シミュレーション教材「民族衣装をつくってみよう」とフォトランゲージ教材「民族衣装を分類してみよう」で構成した。各々の教材は、45分程度で実施可能なものとし、大学の授業であれば1コマ(90分)で行えるものとした。また、高等学校の授業であれば2コマで実践できるようになっている。全体の学習指導案を表1に示す。

### 教材1「民族衣装をつくってみよう」

人体模型（デッサンドール）、布、はさみ、ホチキスを用いてグループごとに、簡単な衣装を制作するシミュレーション教材である。主として「共通性」を発見することに主眼を置いている。人類が植物繊維をつむぎ原始的な機を用いて織る技術を手に入れたことから多様な民族衣装が生まれていった。逆に言えば、多くの民族衣装は、シンプ

ルな生産技術に根ざしてつくられているものがほとんどである。それらを体験的に学ぶことができるよう、布、はさみ、ホチキス（縫製技術を単純化したもの）での衣装制作に取り組むアクティビティである。グループごとに制作された衣装を、まく、あな、わ、はく、その他の5つに分類して教材1を終える。

### 教材2「民族衣装を分類してみよう」

教材1で学習した4つの分類概念を用いて、世界の民族衣装を分類するというアクティビティである。民族衣装は、カード化されており写真、民族衣装名、国名、特徴が記載されている。学習者はカードの情報を読み解きながら、世界の民族衣装を4つの区分に従い分類していく。教師が一方的に、民族衣装を紹介する知識伝達型の授業では、つまらないものとなるが、グループでディスカッションしながら分類することにより、興味関心をひきつけるとともに主体的な学習活動となる。

取りあげた民族衣装は田中の分類したものを基本として世界の多くの地域をカバーできるように配慮し16の民族衣装をカード化した（表1）。分類のアクティビティを通じて、4つの区分の中にも、各地に多様な民族衣装があること（多様性・相違性）に気づくことがねらいである。

学習者が分類した後、解答を行う。解答は、カードの裏面に隠されている。分類したカードを裏返し、そこに描かれた図柄を組み合わせで「まく」「あな」「わ」「はく」の文字が出来上がれば、その分類は正解である。文字パズルが組みあがらない場合は、分類に間違いが含まれていることになる。学習者は、文字パズルを組み合わせながら主

表1 民族衣装カードの種類

まく	サリー (インド)	パー・チュンバン (タイ)	チマ (韓国)	ケンテ (ガーナ)
あな	ボンチョ (チリ)	ケスケミトル (メキシコ)	ガラビア (エジプト)	ボンチョ (タイ カレン族)
わ	ロンジー (ミャンマー)	サロン (マレーシア)	パー・シン (タイ)	リエン (中国)
はく	シャンポール (イラン)	トンボン (アフガニスタン)	バンタネス (グアテマラ)	レーダーボーゼン (ドイツ)

表2 「世界の民族衣装～カタチの多様性と共通性」の学習指導案

<p>対象：文化学園大学 現代文化学部 国際ファッション文化学科 スタイリスト・コーディネーターコース3年（34名） 授業者：豊田 かおり（文化学園大学 助教）</p>	
<p>教科領域との関連性： スタイリスト・コーディネーターコース必修科目「スタイリスト論Ⅱ」の1コマとして実験授業を実施した。</p>	
<p>実施時期：2012年7月13日</p>	<p>総時数：1コマ（90分）</p>
<p>教育目標： 【知識・理解】 ・世界には様々な民族衣装があり、その形態はいくつかのパターンに分類できることを知る。 ・世界の民族衣装は、その土地の気候や風土、文化と結びついて発達してきたことを理解する。 【技能】 ・分類パターンにもとづき、カードに書かれた情報を読み解きながら世界の民族衣装を分類することができる。 【態度】 ・メンバーと協力し、グループワークに主体的に参加することができる。 ・民族衣装に関心をもち文化的多様性を肯定的に受容することができる。</p>	<p>キーワード (学習内容) 民族衣装 異文化理解 文化的多様性と共通性  (学習方法) シミュレーション フォトランゲージ(カード教材)</p>
<p>展開計画</p>	
	<p>主な学習活動と学習者の意識</p>
	<p>留意点</p>
<p>教材1…民族衣装を作ってみよう</p>	<p>【発問・活動の指示】</p> <p>T：大昔、人類は、植物から繊維をとりだし糸をつむぎ、それを機で織って布をつくることを発明しました。その布からさまざまな服をつくりました。皆さんも布を手に入れた当時の人になって、配られた道具を使って服をつくってみよう。</p> <p>【共有】 どんな服が出来たか発表 グループごとに発表する イメージしたこと／工夫した点／苦労した点／服の名前</p> <p>【解説】 民族衣装のカタチの4分類 T：民族衣装を収集・コレクションした田中千代という人は、『世界の民族衣装』という本のなかで民族衣装を「まく」「あな」「わ(つつ)」「はく」の4つに分類しています。それぞれ特徴は…</p> <p>【整理】 自分たちの作品の分類 T：みんなの作った服は「まく」「あな」「わ(つつ)」「はく」のどれにあてはまるかな？</p> <p>S：いろいろな民族衣装のカタチは様々だけれど、巻くだけのシンプルなものから体に合わせたものへと4つに分けられるんだな。</p>
	<p>※導入5分</p> <p>◆3～4人のグループ ◆配布する物 ハサミ・ホチキス・布（15×100cm）・デッサンドール ワークシート ※制作20分 ※共有10分</p> <p>◆PPT資料を用いて解説 「まく」「あな」「わ(つつ)」「はく」の4つの特徴 ※解説5分</p> <p>◆学生の作品を4つの区分に照らし合わせて分類 ※整理5分</p>
<p>教材2…民族衣装を分類してみよう</p>	<p>【発問・活動の指示】</p> <p>T：世界の様々な民族衣装を「カタチの4つの分類」を使って分けてみよう。 16枚の民族衣装カードは、「まく」「あな」「わ(つつ)」「はく」のどれかに4枚ずつ分けられます。カードの情報をよく読んで分けてください。</p> <p>【解答】 文字パズルによる解答 T：答えは、カードの裏に隠されています。「せーの」でめくってみてください。 カードをめくると裏面には「まく」「あな」「わ(つつ)」「はく」の文字が分割された文字パズルになっている。正解だとパズルが組みあがる。</p> <p>【解説】 世界の民族衣装と文化 16の民族衣装を分類ごとに解説する。なぜその分類なのか、民族衣装の特徴、文化的背景、気候風土との関係、素材や模様の特徴などを補足的に説明する。</p> <p>S：似たようなカタチの民族衣装にも、着られている国や地域ごとにいろいろな特徴があるんだな。民族衣装って面白い。</p>
	<p>※導入5分</p> <p>◆配布するもの 民族衣装カード（16枚1セット） ◆カードの情報をよく読むように指示。裏は見せない。 ※分類作業15分 ※解答5分</p> <p>◆PPT資料を用いて解説 ※解説15分</p> <p>◆授業の感想を何人かに聞く 感想シートを書く。 ※まとめ5分</p>

体的に、分類の正解、不正解を確認していく。

その後、16の民族衣装を分類ごとに解説する。なぜその分類なのか、民族衣装の特徴、文化的背景、気候風土との関係、素材や模様の特徴などを補足的に説明し授業を終える。

### 3. 教材「世界の民族衣装～カタチの多様性と共通性」の実践

実験授業は、文化学園大学現代文化学部国際ファッション学科スタイリスト・コーディネーターコース3年生を対象に2012年7月30日に実施した。参加学生は34名であり、3～4名の9つのグループを編成した。以下、授業の様子を記す。

#### 3.1 民族衣装を作ってみよう

学生たちは、すでに服装造形の基礎的なスキルを身につけていることから、配布された材料からスムーズに制作に取りかかることができた。デッサンドールに布をあてがいがながら、イメージを膨らませディスカッションをしながら、制作を進めていた。

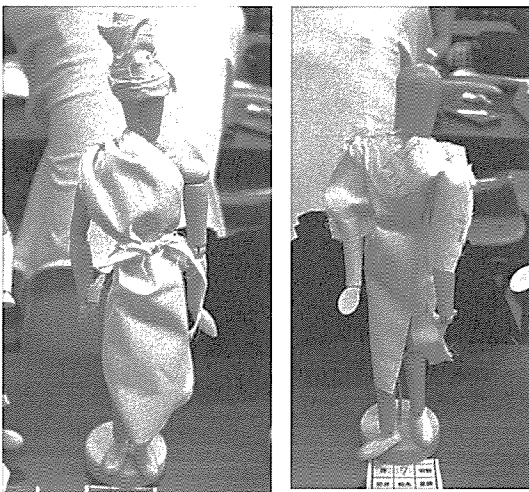


写真1 制作された作品例

多くのグループが、古代ギリシア、ローマ、近年、漫画や映画で話題となった『テルマエロマエ』をイメージとして挙げ、「まく」(掛布型)タイプの作品を制作した(写真1左)。他には、チャイナドレスをイメージし体形型にあわせ「あな」や

「はく」を組み合わせた作品(写真1右)などが出来上がった。「まく」「あな」「わ」「はく」の4分類の特徴を解説した後、学生たちに自分たちの作品を分類させたところ9グループ中、6グループが「まく」に分類し、「わ」「あな+はく」、「まく+あな」がそれぞれ1グループずつという結果であった。

#### 3.2 民族衣装を分類してみよう

4つの区分にカードを分類する活動は、正解不正解があるクイズ的要素が含まれた活動であり、カードの情報がヒントとなるよう仕掛けられた教材である。学生たちは「正解」したいという思いからか、カードの情報を能動的に読解する様子やグループ内で意見交換し協力して課題に取り組む姿が見られた。

しかし、文字あわせによる解答を行ってみると全問正解のチームはなく、「え～」や「あーっ」といった声があがり、正解に驚いた様子であった。これは例えば、タイのパー・チュンガベンのように、見た目はズボンをはいているように見えるものでも、パー・ヌンという1枚の腰布をズボン型に巻いているなど、カードの情報を正確に読み解かないと解けない問題が含まれていたためである。解答後におこなった16種類の民族衣装の解説は、カードに書かれた内容以上の詳しい情報を示したが、熱心に聴く学生が多く見られた。

### 4. 学習者の学び—事前・事後アンケートの結果から

本教材実践の事前、事後に受講生に回答してもらったアンケート結果について述べる。

まず、事前アンケート(n=32)では、「民族衣装への興味・関心」(図1-1)、「知っている民族衣装」(図1-2)、「民族衣装のイメージ」(図1-5)の3点について尋ねた。

民族衣装への興味・関心については、半数以上が「まあある」と回答し、「とてもある」と合わせると7割の学生が肯定的な関心を示した。また「どちらともいえない」が約2割を占め、「あまりない」は6%と少数であった。

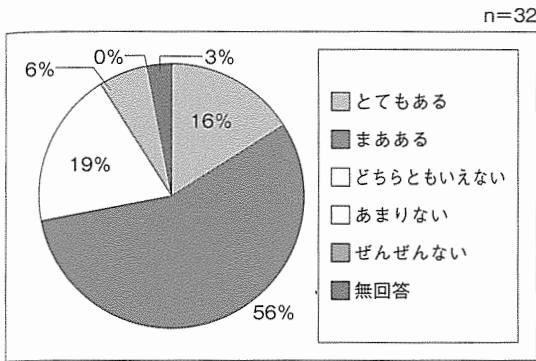


図1-1 事前：民族衣装への興味・関心

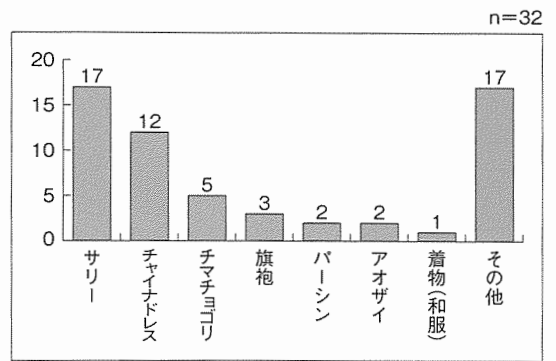


図1-2 事前：知っている民族衣装（複数回答）

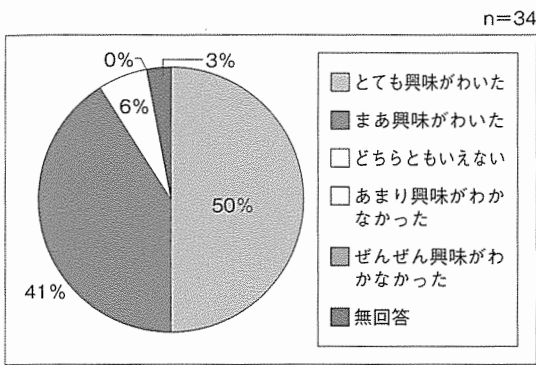


図1-3 事後：民族衣装への興味関心の変化

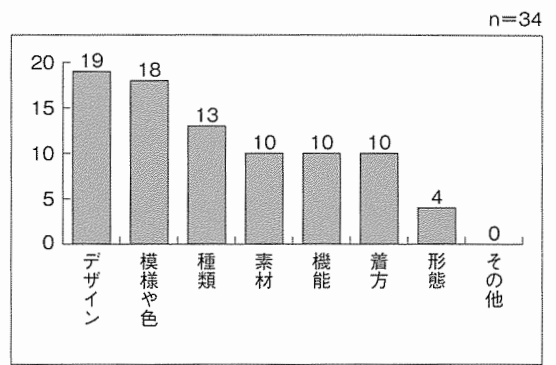


図1-4 事後：さらに学びたいこと（複数回答）

プレ n=32 / ポスト n=34

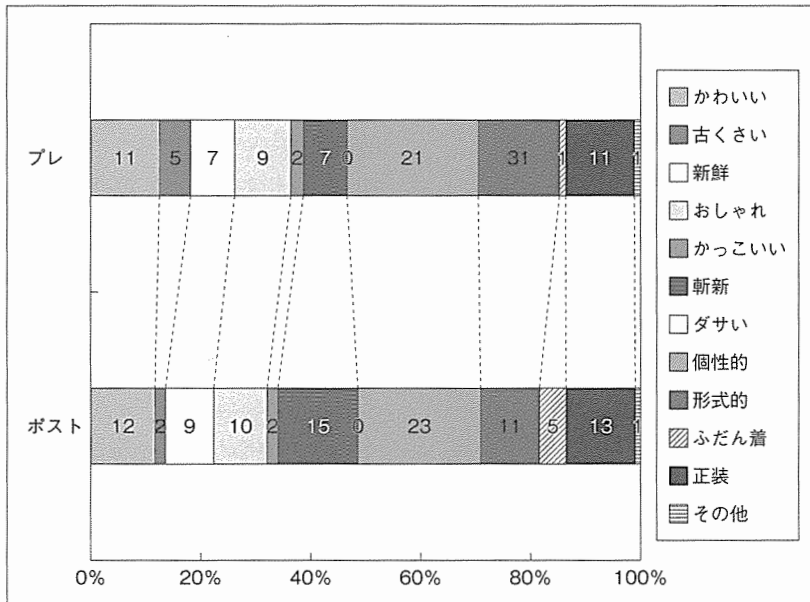


図1-5 民族衣装のイメージ 事前・事後比較

図1 事前・事後アンケート結果

「知っている民族衣装」(自由記述・複数回答)では、インドのサリー、中国のチャイナドレス、韓国のチマチョゴリの回答が多く、これらの合計が全体の約6割を占め残りは少数であった。民族衣装に関心を持ちつつも、具体的に知っている民族衣装は、極わずかであるとの実態が浮かびあがった。少数の回答では中国の旗袍や、タイのパーシンなどが挙げられたが、いずれも留学生の回答であった。

事前アンケートでの「民族衣装のイメージ」(3つまで選択可)は「個性的」という回答が最も多く、「形式的」「正装」と捉えている一方、ほぼ同数が「かわいい」「おしゃれ」とも捉えていた。

事後アンケート(n=34)では、「民族衣装への興味・関心の変化」(図1-3)、「今後さらに学びたいこと」(図1-4)、「民族衣装のイメージ」(図1-5)を選択肢形式で尋ねたことに加え、「全体を通してどのような学びがあったか」「教材1でどのような学びがあったか」「教材2でどのような学びがあったか」を自由記述形式で尋ねた。

「民族衣装への興味・関心の変化」は、半数が「とても興味がわいた」と回答し、「まあ興味がわいた」と合わせると9割の学生が民族衣装への興味を増す結果となった。

「民族衣装へのイメージ」については、事前と比較し、大きな変化は見られなかったが、「斬新」や「ふだん着」という回答が増えている。

「さらに学びたいこと」(複数回答)では、「デザイン」や「色や文様」の回答が多かったが、今回取り上げた「形態」以外の「種類」「素材」「機能」「着方」にも多くの学生が関心を示し、多面的に民族衣装を学びたいと感じたことが伺われる結果となった。

自由記述を一部抜粋したものが、表3である。A、B、C、Dのコメントは、民族衣装の多様性に着眼したものであり、特にCやDは、そのことを面白いと感じたり、さらに知りたいと興味が増したことを示唆している。Eのように4つの分類があることを知った、学んだというコメントは多くの学生が記述している点であり、共通性に着眼したものである。Fはさらに、分類によって認識でき

表3 事後アンケートの結果(自由記述 一部抜粋)

- A: 民族衣装の特徴に大きく影響しているのがそれぞれの国や地域の環境や歴史が作用していることを学びました。
- B: 世界の民族衣装を学び、いろいろな国のいろんな衣装があり、気候や習慣にあった衣装を作って着ていたことを学びました。
- C: 一言で民族衣装と言われても、布を巻きつけているような物やチャイナドレスなどのようなものしか思い浮かばなかったけれど、改めて色々な国や地域の民族衣装を見てみるとそれぞれの形状や布の使い方に込められた意味がたくさんあり面白いと思いました。
- D: 国によって民族衣装は、全然違うんだと思いました。デザインや色に意味があることなど初めて知ったことが多かったです。今まではあまり興味がありませんでしたが、もっと色々な国の民族衣装について知りたいと思いました。
- E: 民族衣装には、わ、まく、あな、はくと4つの種類に分類できるということがわかりました。
- F: 分類することによって世界中のいろいろな民族衣装が認識できるようになって、もっと民族衣装を調べたかったです。
- G: 分類することで、絵や文章から読み取り、どういう作りになっているのか理解することができ、今まで知らなかった民族衣装も学ぶことができました。
- H: 見るだけでなく、実際にやってみて新たな発見がありました。想像して実際に作ってみるとこうなるんだ、と思うことができました。
- I: この授業は楽しいと思いました。ゲームの中で知識を学びました。はじめに衣装を作ることから始め、次に知識を学び、その知識をつかったゲーム活動をするという流れでいい授業でした。
- J: 文や写真でもわからないところもあったので、もっと色々な国の民族衣装を見てみたいと思いました。全部4つに分類されていて根源は一緒ということを実感しました。
- K: 実際につくってみると、どうしても「切る」「縫う」という衣装しか思いつかなかった。昔の人は一枚の布でさまざまな巻き方やデザインを考えてすごいいいと思いました。
- L: 国によっては、縫ったり、切ったりもせずにただの一枚の布からたくさんのパターンの服や着方などがあるんだと感じました。

るようになるという分類の意義までも理解したことを示唆している。G、H、Iのように参加型学習の手法を肯定的に捉えているコメントも複数見られた。Jは、実物への関心を示すものであると同時に、「根源は一緒」形の共通性を強く認識したことが伺える。KやLは、民族衣装に見られるシンプルな布の活用による多様な着方という特性について、現代の体形型の洋服と比較し新鮮なものと捉えている。この授業での学びを、今後の学びや制作に活かしたいとのコメントを記述する学生も複数見られた。

## 5. 考察—教育目標に対する到達度

表2の学習指導案に示した本教材の教育目標は以下の通りであった。

### 【知識・理解】

- (1) 世界には様々な民族衣装があり、その形態はいくつかのパターンに分類できることを知る。
- (2) 世界の民族衣装は、その土地の気候や風土、文化と結びついて発達してきたことを理解する。

### 【技能】

- (3) 分類パターンにもとづき、カードに書かれた情報を読み解きながら世界の民族衣装を分類することができる。

### 【態度】

- (4) メンバーと協力し、グループワークに主体的に参加することができる。
- (5) 民族衣装に関心を持ち文化的多様性を肯定的に受容することができる。

「知識・理解」目標の(1)については、アンケート記述Eのコメントに代表されるように、多くの学生が4つの区分を理解したと考えられる。(2)についてもFの記述のような散見されており一定の理解がなされたといえる。

「技能」目標である(3)については、全問正解するグループは見られなかったものの、「難しい」とつぶやきながらも熱心にカードの情報を読み解こうという姿が観察されており、その様子はGの記述や学習活動全体を肯定的に捉えているIの記述からも読み取れる。むしろ、簡単に全問正解できないが、「4つの区分」の概念を応用することである程度は、解けそうである—という課題レベルが学習者の意欲を喚起することにつながったと考えられる。

「態度」目標の(4)についても、学習過程の多くの場面で、協力し課題に取り組む姿が見受けられた。(5)の民族衣装への関心は、本実践の事前段階から持っている学生が多かった(図1-1)が、事後では半数が「とても興味がわいた」とより関心を強く抱くようになった(図1-3)。民族衣装に対するイメージもポジティブまたは中立的なイメージ

がほとんどを占めており、ネガティブな回答はほとんど見られなかったことから、民族衣装に見られる文化的多様性を受容できたと考えられる。

ただし、統計的に有意な結果を導くには今回の実験授業のサンプル数は不足している。また、事後アンケートは、実験授業の直後にとったため、この学習の効果がどの程度、学習者に定着したかについては、ある程度時間が経過した段階で何らかの測定をする必要がある。特に、「態度」に関しては短時間では変容させることは難しく、短期的な反応である可能性を否定できないものとして捉えるべきであろう。

## 6. まとめ

本研究では、ファッション教育においてグローバル人材を育成していくために、グローバル人材の要素として挙げられた「異文化に対する理解」を育む教育実践の一事例として、民族衣装を題材とする教材開発を行いその実践と検証を試みた。

その結果、学習方法として取り入れた参加型学習が、学生に能動的学びをもたらし、かつ、異文化理解の視点として取り上げた文化的多様性と共通性を受容という点で一定の効果が見られることを示唆する結果が得られた。

しかしながら、ファッションビジネス領域におけるグローバル人材が備えるべきコンピテンシーが明らかではないため、本実践の教育目標そのものが適切であった否かについては十分に検証できていない。したがって、そのコンピテンシーを明らかにするなど、ファッション教育におけるグローバル人材の育成方略自体を検討することが大きな課題である。他方、本実践の継続課題としては、実験授業を繰り返し、サンプルデータを蓄積すること、さらに、民族衣装のカタチのみならずデザインや色、素材、機能といった多角的なアプローチからの異文化理解のためのファッション教育の教材やカリキュラムを開発していくことが必要と考える。

## 注釈および参考文献

- 1) グローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」2012年, 8頁.  
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2012年10月4日アクセス)
- 2) 高橋晴子監修『国際理解に役立つ民族衣装絵事典 装いの文化をたずねてみよう』PHP研究所, 2006.
- 3) 石山彰監修・久保田陽子文『国際理解に役立つ世界の衣食9 アジアの民族衣装』小峰書店, 2001.
- 4) 石山彰 監修・久保田陽子文『国際理解に役立つ世界の衣食10 ヨーロッパ, 南北アメリカ, アフリカ, オセアニアの民族衣装』小峰書店, 2001.
- 5) 柴静子・日浦美知代・一ノ瀬孝恵・高橋美代子・佐藤敦子・木下瑞穂・高田宏「針と糸の民「モン族」の暮らしと織物の教材化に関する研究」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第38号, 2010, 155-161頁.
- 6) 小川安朗『民族衣装の生態』東京書籍, 1979.
- 7) 田中千代『世界の民俗衣装 - 装い方の知恵をさぐる -』平凡社, 1985.
- 8) 参加型学習とは, 主として開発教育の分野で発達してきた学習形態である. 従来の講義のような一方の知識伝達型の学習ではなく, 学習者が学習過程に参加することを促すような学習形態を指す. ロールプレイ, シミュレーション, ランキング, フォトランゲージな

ど多様な学習形態が含まれる. 詳細は, 以下の図書を参照のこと.

- ロバート チェンバース『参加型ワークショップ入門』明石書店, 2004.  
開発教育協会編『開発教育』第54号 (特集: 参加型開発と参加型学習), 明石書店, 2007.  
開発教育協会編『開発教育実践ハンドブック - 参加型学習で世界を感じる 改訂版』開発教育協会, 2012.

## 教材作成にあたり参考とした資料 (上記参考文献をのぞく)

- 1) 丹野郁監修『世界の民族衣装の事典』東京堂出版, 2006.
- 2) 文化学園服飾博物館編『世界の伝統服飾 - 衣服が語る民族・風土・こころ -』文化出版局, 2001.
- 3) 国立民族学博物館 服装・身装文化データベース  
<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/mcd/clothing.html>  
(2012年10月10日アクセス)
- 4) 田中千代・民俗衣装・コレクション  
<http://www.h6.dion.ne.jp/~fu35/minzokuHP/minzoku.html>  
(2012年10月10日アクセス)
- 5) 文化学園服飾博物館所蔵品データベース  
[http://www.bunka.ac.jp/museum/text/database\\_1.html](http://www.bunka.ac.jp/museum/text/database_1.html)  
(2012年10月10日アクセス)